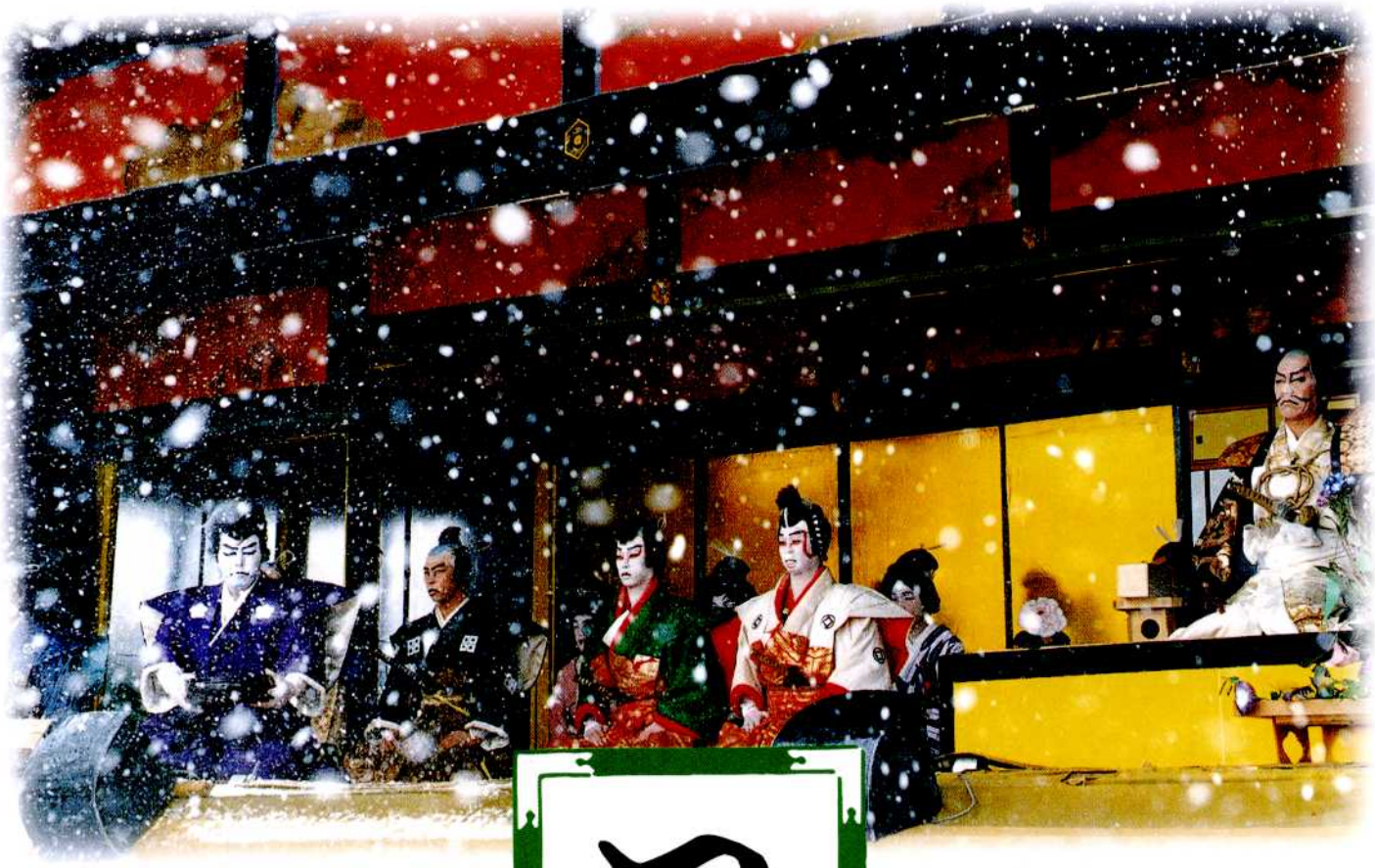

黒森歌舞伎

山形県指定無形民俗文化財

黒森歌舞伎の魅力を探る

雪に蘇る村芝居

庄内の冬は立春を迎えてからが本番だ、といわれる。この地方では、節分の豆まきが終わった頃から、巻き返しのような寒気におそわれることがあるからだ。冷たい北西の季節風が吹き荒れ、地吹雪が舞い上がって道をふさぎ、人々を再び雪の中に閉じこめてしまう。こんな時は一日中氷点下の真冬日となるのも珍しくない。南の方から春の便りが届くというのに、さながら冬のあがきのような、そんな日々をやり過ごさないと、庄内の春はやってこないのである。

毎年、二月十五日・十七日の二日間、そのぶり返す冬空の真只中、しかも降り積む雪の中で、村芝居黒森歌舞伎が上演される。

鎮守日枝神社に奉納されるこの芝居は、広い境内を桟敷（客席）にし、社殿に並ぶ常設の演舞場を舞台に演じられる。見物衆は厚く積もった雪の上に藁やゴザを敷き、そこに座って見物する。芝居ならざる〝雪居〟である。時折、雪が舞い、風が吹き付けることがある。そして一瞬、白いベールに覆われたように何も見えなくなる。見物衆の頭や肩にも雪が降りかかって、桟敷も一面に白くなる。それでも芝居は休まずに続けられ、客もまた身じろぎもせずに、じっと舞台に見入る。

かくして、延々五時間にも及ぶ熱演が、薄ぼんやりとして宵やみに包まれる頃に、最後の幕が引かれる。

異様というか、雪の幻想とでもいおうか、そこには、現実から遠ざかった別世界のようにして、おおどかな村芝居が生き生きと蘇るのである。それ故に、「寒中芝居」「雪芝居」の異名をとり、夏に上演される福島県南会津郡の檜枝岐歌舞伎と並んで、東北の二大村芝居〝冬の黒森・夏の檜枝岐〟として親しまれ、広く知られるようになった。

村芝居のふるさと黒森

酒田市街から南に約九キロメートル行った所に、酒田市大字黒森がある。戸数四百戸、人口千七百人の、よくまとまった一つの集落で、日本海岸に連なる小高

くなだらかな砂丘を背にし、全面に広がる庄内平野の美田を耕しながら、畑作や施設栽培など多角的な農業を営む、裕福な地区である。ここの歴史は古く、大正十年（一九二一）地内に流れる赤川を切り開く河川改修事業で、堀削工事の際多数の石器、縄文土器、炉の跡などが出土したことから、先住民の集落跡ではないかとも注目されている。（酒田市史）

開村は、鎌倉時代説もあるが、弘和元年（一三八一）黒森日枝神社創建（酒田市史）とあり、先年、同神社創建六百年祭記念の碑が建立されたこともあって、南北朝の頃ではないかとの説も出されている。

海、山、川、水田に囲まれ、こんもりと茂る樹林に包まれた黒い森には、きっと豊富な生活資源が蓄えられ、大きな集落が形成される条件が満たされていたに違いない。

中世末から近世にかけてこの村は更に成熟していくが、その過程で祭祀に伴う余興としての芸能が導入され、神社に奉納する神事芸能となり、同時に村人の格別の娯楽として定着し、受け継がれるようになる。

黒森歌舞伎の調査をしてこられた民俗学者丹野正氏は「黒森には、歌舞伎芝居の前に何らかの神事芸能が奉納され、村人の娯楽として伝承されていたと考えられる。二月十五日というのは旧暦の小正月にあたり、黒森ではこの日道祖神の祭典を挙行し、余興としてある種の芸能を演じていたものだろう。ところが、江戸時代の中頃になって、江戸の方から巡業してきた旅役者一座の歌舞伎芝居を見た村人がこれに熱狂してしまい、ついに習い覚え、やがてこの祭りに上演、奉納するようになった。つまり、従来の芸能から、もっと新しく面白い、そして勧善懲悪の思考を盛った歌舞伎劇に転向した。この新しい演劇は、村づくりにも寄与しながら次第に充実していって、やがて「地芝居」となる。それがいつの間にか、本来の祭典よりもアトラクションである芝居の方が大きくなり、更に近郷近在の人気をも集めて今日に至った」とみておられる。

一座に保存されている記録や文書などから推して、この村芝居は、享保年間の中頃にはじまったとみられる。幾多の風雪に堪え、およそ二百六十年の年輪を刻みながら、昔の姿を今に残してくれている。黒森は、歌舞伎全盛期の頃の様子を、村芝居の中で見せてくれるいわば、歌舞伎のふるさとなのである。

組み立て式舞台と縄張りの枡席

黒森歌舞伎は「妻堂連中」と称する組織が一座をなし、芝居の上演とそれに関わる資料や財産の管理にあたる。組織の内部は、振者（または狂言方）、浄瑠璃、囃子（または下座）役者、衣装、床山、大道具、小道具、舞台などの各部に分かれ、総勢五〇余名で構成される。座員は原則として世襲制でしかもこの地で出生した男子とされてきたが、今はこれにこだわらない。長い年月、世襲制を維持することで伝統を絶やさぬようにし、父子相伝によって芸を磨き、競い合ってきたもので、これは、他の伝統芸能にも相通じることである。取り上げる狂言（演目または外題）は全部「時代物」（古典歌舞伎）である。村芝居が時代物を演ずるのは、全国どこも同じだが、上演台本が五十本もあって、しかもその多くを「通し狂言」つまり助段から終演まで長々と演じてきたというのは、特異である。今は、観客の好みに迎合するように、見せ場をつないで盛り上げるような構成となっているが、以前は、昼間から暗くなるまで日がな一日、雪中芝居が続いたのだから、素人芸にしては驚くほかない。

舞台の構えや観劇風景も格別な趣を添える。時代が移り、生活が変わるにつれて失われたものもあるが、昭和三十年代頃までを振り返りながら紹介すると、まず、舞台は常設でなく組み立て式であった。掛舞台ともいうが、黒森では芝居小屋といい、村中総出でこれを組み立てる。

仮設とはいえ間口七間半（一三・五メートル）奥行四間（七・二メートル）大がかりなものを、雪を踏み固め、その上に建てる。それに花道もつけられ、下手には下座の控が、上手上段には太夫の語り座もある立派なものだ。板で屋根を葺き、両横と後方は葦簀で囲い、前面には定式幕を吊る。社殿は楽屋となってごった返す騒ぎとなる。舞台中央に置かれる二重舞台は、回り舞台で四隅に大きな木車がつけられていて、場面転換の時は四人の黒子が出て柱にしがみつき、ぎいこぎいこと、大きな音を立てながら回転させる。なかなかうまくゆかず暫く芝居の間が抜ける事があっても、客は息をつめて舞台を見つめる。やっと回って意外な場面が現れると客は声を上げ嵐のような拍手を送る。

昔、江戸の町をにぎわしたあの芝居小屋が東北の雪の中で、こうして再現されていたのである。今は組み立て舞台となったが、そのころを知る者には惜しまれることしきりである。

さて、観劇風景だが、これも芝居小屋とならんで、なかなか風情あふれるばかりだ。村人は今でも桟敷と呼ぶが、広い境内に縄を張り、真ん中に抜き桟敷という特別席をこしらえ、その両側に村中の家の枡席をつくる。勝手に座っていいの

ではない。各家の名札のたつところにその家の家族や親類の者が座る。全席指定というわけである。詰めかけた村人は、かねてから準備して作った〝晴れの御馳走〟を運び込み、降りかかる雪も何のそ

の、いざゆっくりと、芝居を楽しむ。千余の客で賑わうその有様は、おおらかで美しい雪の風物詩として目に映る。

この縄張りの枡席も近年は姿を消し、見物衆の数も減ったが、その名残は今も漂って、観る者をほのぼのとさせてくれる。

太夫振舞と狂言選定

毎年三月上旬、翌年二月に上演する狂言を選ぶ「太夫振舞」という行事がある。これは芝居の上演に次ぐ重要な事で、上演する狂言を、神の御意志に従って決定する厳粛な神事である。村の指導者や妻堂連中の幹部らが参列する神前において、神主の祝詞や捧げものなどの神事を行ったあと、数本狂言名を記したそれぞれの細長い神を紙縒状にして、一升の白米の上に並べ、神前に供える。一方、あらかじめ選ばれた一人の若者が神社の井戸のそばに座り、その水を桶で七杯半浴びて水垢離をとり、狂言名を載せた白米の前で恭しく一本を引き上げる。こうして選ばれたものが「本狂言」となる。この儀式を「御神箋の儀」という。

平和な村を支えた「遊び」

ものの喩えに〝大芝居を打つ〟ということがある。完成された様式をもち、大規模で複雑でしかも歌・舞・伎三様一体となった総合舞台芸術である歌舞伎劇は、まさしく、天下の大芝居である。村芝居とはいえこの雪深い農村でよくぞこれほどの堂々とした歌舞伎を演じ続けてきたものだ。一体、そのエネルギはどこから生まれてくるのだろうか。

村の人は「ここには、芝居の虫がいっぱい住みついていて、雪が降ると、その虫が騒ぎ出すんです。」と笑っていう。黒森歌舞伎は、実は、平和な村を支えるために、村人が神様と一緒になって時には神様を後ろ楯にしながら作り出した、大いなる「遊び」なのである。

正月公演本狂言一覧

年号		上演狂言
嘉永	三 正月	木下桶狭間合戦
〃	五 〃	金ぴら御利生記
〃	六 〃	絵本大功記
〃	七 〃	苅萱道心黒染桜
安政	三 〃	伽羅先代萩
〃	四 〃	義経腰越状
〃	五 〃	伽羅先代萩
〃	六 〃	神霊矢口の渡
〃	七 〃	箱根霊験いざなりの仇討
文久	二 〃	仮名手本忠臣蔵
〃	三 〃	源平布引滝
〃	四 〃	一谷嫩軍記
元治	二 〃	本朝廿四孝
慶応	二 〃	妹背山婦女庭訓
〃	四 〃	蝶花形名家嶋台
明治	三 〃	奥州安達ヶ原 仮名手本忠臣蔵
〃	四 〃	義経千本桜
〃	五 〃	金ぴら御利生記
〃	六 〃	伊賀越道中雙六 絵本太功記
〃	七 〃	ひらかな盛衰記
〃	八 〃	菅原伝授手習鑑
〃	一〇 〃	彦山権現誓助剱
〃	二 〃	太平記忠臣講釈
明治	三 正月	東鑑御狩巻
〃	四 〃	絵本更科勇婦伝
〃	五 〃	長柄長者黄鳥塚
〃	六 〃	苅萱道心黒染桜
〃	七 〃	源平布引滝
〃	八 〃	真田三代記
〃	九 〃	伽羅先代萩
〃	一〇 〃	碁大平記白石噺
〃	一一 〃	狂言不明
〃	一二 〃	苅萱道心黒染桜
〃	一三 〃	奥州安達ヶ原
〃	一四 〃	本朝廿四孝
〃	一五 〃	近江源氏先陣館
〃	一六 〃	義経千本桜
〃	一七 〃	仮名手本忠臣蔵
〃	一八 〃	ひらかな盛衰記
〃	一九 〃	東鑑御狩巻
〃	二〇 〃	一谷嫩軍記
〃	二一 〃	妹背山婦女庭訓
〃	二二 〃	ひらかな盛衰記
〃	二三 〃	尼子十勇士二度目誉
〃	二四 〃	鑑山石山軍記
〃	二五 〃	箱根霊験いざなりの仇討
〃	二六 〃	中将姫蓮の曼陀羅
〃	二七 〃	肥後駒下駄孝子仇討
〃	二八 〃	住吉祭礼天下茶屋仇討
〃	二九 〃	奥州千代萩
〃	三〇 〃	大和文語恨の稲妻
明治	四 二月	由良湊千軒長者
〃	四五 〃	苅萱道心黒染桜
大正	二 〃	源平布引滝
〃	三 〃	花上野誉石碑
〃	四 〃	小栗判官車御道
〃	五 〃	高田馬場一八番切
〃	六 〃	いろは文庫忠臣鏡
〃	七 〃	三日太平記
〃	八 〃	長柄長者黄鳥塚
〃	九 〃	肥後夜桜福井仇討
〃	一〇 〃	木下桶狭間合戦
〃	一二 〃	奥州安達ヶ原
〃	一三 〃	本朝廿四孝
〃	一四 〃	彦山権現誓助剱
〃	一五 〃	霊験記若松礎
昭和	二 〃	天の橋立誉の仇討
〃	三 〃	義経千本桜
〃	四 〃	伊賀越道中雙六
〃	五 〃	名槍傳柳河の仇討
〃	六 〃	仮名手本忠臣蔵
〃	七 〃	更科勇婦伝
〃	八 〃	肥後駒下駄孝子仇討
〃	九 〃	真田三代記
〃	一〇 〃	ひらかな盛衰記
〃	一一 〃	大和文語恨の稲妻
〃	一二 〃	由良湊千軒長者
〃	一三 〃	鑑山石山軍記

昭和一四年二月
〃一五 一七五 尼子十勇士二度目誉
〃一六 一七五 菅原伝授手習鑑
〃一六 一七五 住吉祭礼天下茶屋仇討
〃一七 一七五 苅萱道心黒染桜
〃一八 一七五 花上野誉石碑
〃一九 一七五 高田馬場一八番切
〃二〇 一七五 いろは文庫忠臣鏡
〃二一 一七五 奥州安達ヶ原
〃二三 一七五 肥後夜桜情上使
〃二三 一七五 伊達競阿國劇場
〃二四 一七五 本朝廿四孝
〃二五 一七五 彦山権現誓助釼
〃二六 一七五 源平布引滝
〃二七 一七五 盲長屋梅加賀鳶 御所桜堀川夜討 三日太平記
〃二八 一七五 近江源氏先陣館 幡州皿屋敷
〃二九 一七五 菅原伝授手習鑑 一谷嫩軍記
〃三〇 一七五 仮名手本忠臣蔵
〃三一 一七五 鬼一法眼三略記 太閤記
〃三二 一七五 菅原伝授手習鑑 梶原平三誉石切
〃三三 一七五 義経千本桜
〃三四 一七五 奥州安達ヶ原
〃三五 一七五 伽羅先代萩
〃三六 一七五 昔談柄三荘大夫 鎌倉三代記
〃三七 一七五 ひらかな盛衰記
〃三八 一七五 昔語鶯塚
〃三九 一七五 時今也桔梗旗挙 吉例寿曽我
〃四〇 一七五 鏡山舊錦絵
〃四一 一七五 義経千本桜

昭和四二年二月
〃四三 一七五 仮名手本忠臣蔵
〃四四 一七五 本朝廿四孝
〃四四 一七五 高田馬場一八番切
〃四五 一七五 菅原伝授手習鑑 一谷嫩軍記
〃四六 一七五 蝶千鳥曽我対面
〃四七 一七五 奥州安達ヶ原 仇討天下茶屋 太閤記
〃四九 一七五 源平布引滝
〃五〇 一七五 伽羅先代萩
〃五一 一七五 ひらかな盛衰記
〃五二 一七五 義経千本桜
〃五三 一七五 仮名手本忠臣蔵
〃五四 一七五 近江源氏先陣館 鎌倉三代記
〃五五 一七五 彦山権現誓助釼
〃五六 一七五 絵本太閤記
〃五七 一七五 本朝廿四孝
〃五八 一七五 菅原伝授手習鑑
〃五九 一七五 奥州安達ヶ原
〃六〇 一七五 一谷嫩軍記 工藤館曽我対面
〃六一 一七五 高田馬場一八番切
〃六二 一七五 義経千本桜
〃六三 一七五 菅原伝授手習鑑
平成元年 一七五 ひらかな盛衰記
〃二 一七五 伽羅先代萩
〃三 一七五 仮名手本忠臣蔵
〃四 一七五 源平布引滝
〃五 一七五 義経千本桜
〃六 一七五 近江源氏先陣館 青砥稿花紅彩画

平成七年二月
〃八 一七五 時今也桔梗旗挙
〃九 一七五 奥州安達ヶ原
〃一〇 一七五 菅原伝授手習鑑 一谷嫩軍記 青砥稿花紅彩画
〃一二 一七五 伽羅先代萩 青砥稿花紅彩画
〃一三 一七五 ひらかな盛衰記 青砥稿花紅彩画

黒森歌舞伎保存会のこと

昭和三十一年の秋に結成され、現在大勢の方々から加入してもらい、ご支援いただいています。

会の趣旨は、後継者の養成、かつら、衣装、道具、鳴物、装置などの整備充実、演出、演技の研究、酒田市民会館での定期公演と市外での公演のあっせん、資料収集と刊行、紹介などの経済的援助と併せてこれを行ない黒森歌舞伎の保存育成をはかっています。これまでにも会員各位の芳志をいただいた大きな成果をあげてきましたが、今後ますます強力な援助を行なって、黒森歌舞伎の保存に尽くすことにしております。会費は個人会員が一口一、〇〇〇円・法人会員が一口五、〇〇〇円になっています。

皆様にひろく入会をおすすめいたします。

保存会事務局
酒田市本町二丁目二番四五号
酒田市教育委員会文化課内

発行　黒森歌舞伎保存会
平成十二年三月